

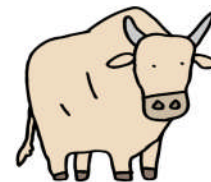
2009. 1. 1

月刊通信

はなしがいい

第270号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円 千共）

新年おめでとうございます。とはいっても、きびしい時代です。労働者の生活状況はますますきびしくなっています。昨年は一つの象徴として小林多喜二『蟹工船』のベストセラーがありました。わたしもインターネットに『蟹工船』の表現よみをアップしました。文学的には荒っぽいと思っていた作品の意外な細やかさに感心しました。今も昔も働く人たちに犠牲を強いる資本主義の制度は共通です。

●労働者の立場・資本家の立場

さて、前号とりあげた内田樹さんの著作『街場の現代思想』（2008文春文庫）で一つ気になる問題が残っています。大学院でのゼミ授業を紹介したところに、次のような指摘がありました。

「彼女たちが資本主義を論じるときの視点は「消費者」および「賃金労働者」に限定されており、「経営者」（あるいは「資本家」）という視点が構造的に欠落している。」

ここを読んだときハッとしました。自分にも「経営者」の視点が欠けていると思ったからです。わた

しは事務用品販売の店の子として生まれ育ちました。家の商売を継ぐために、大学も経営学部に進みましたが、結局、「経営者」とはなりませんでした。それには学生時代の思想の影響があります。

学生運動が盛んだったのは一九六〇年代の後半でした。わたしは一九七〇年に大学に入学して四年間を過ごしました。当時、社会の見方に大きな影響をあたえたのはマルクスの思想でした。内田さんは次のような指摘をしています。「マルクスの著作には「労働者」と「消費者」の視点はあがあるが、「資本家」からの視点による記述はほとんどない。資本家は「ひたすら利潤の増大を追求するもの」というきわめて単純な定義でくくられている。」

反論を招きそうなおかしい言い方です。しかし、わたしには十分な刺激です。七〇年代の思想は、一九七三年のオイルショックを境に大きく変化しました。日本経済は「生産」による経済成長から「消費」の時代へと変わります。学生運動も、連合赤軍のリンチ事件などによって、急速に影響力を失います。当時の学生運動では、「資本家か、労働者か、ど

ちらの立場に立つのか？」という根本が問われました。それは、社会の全体構造を広く見とおして考えることよりも、「どちらの味方をするのか」という性急な選択を迫るものでした。

わたしの場合、まず「労働者」の立場を選んで、そこから社会について学ぶという方向を取りました。あらゆる問題を一つの側から見ていました。「どちらに味方して、どちらを勝たせるのか」といった二者択一の勝敗を争うような意識でした。

● 福沢諭吉の政治論

内田さんの指摘から思いついたのは、福沢諭吉『学問のすすめ』でした。そこには、新しい制度を目ざして全体社会を見とおす視点がありました。専門学校の「社会学」の授業でも紹介しました。

現代の日本は今また、明治の「文明開化」のような転換期を迎えようとしているのではないか。これは社会の衰退ではなく、新たな社会を産もうとする苦しみかもしれない。それは教育や文化などの全体に及ぶものだ。その意味で福沢諭吉の啓蒙思想を見

直す価値があるだろう——そんなつもりでした。

原文は文語体ですが現代語訳もあります。『学問のすすめ』（伊藤正雄訳／初版1977／22刷1993）社会思想社）です。『学問のすすめ』は、明治五年から九年にかけて小冊子の形で刊行された十七冊をまとめたものです。冒頭に書かれた「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」ということばが有名です。福沢の啓蒙思想はフランス革命の「自由、平等、博愛」にもとづくものです。

第六、七編に国民主権の解説があります。「政府は、国民の代理人である。だから、国民の期待に添うように、政治をすべきものである。」「国民は自分たちの代理人として政府を設けて、これに良民保護の役目を任せる。その代わりに、役員の給料はもちろん、政府の諸費用も全部国民が負担すること政府と約束したわけである。」

その結果、国民は次のような立場を取ります。「国民が政府に従うのは、政府の作った法に従うというより、むしろ自分の作った法に従うといつてよからう。」「国民は一人で二役を勤めるようなも

のであろう。つまり、一つの役目は、自分の代理人として政府を設け、国中の悪人を取り押えて、善人を保護することである。もう一つの役目は、政府との約束をよく守り、その法に従って、政府の保護を受けることである。」

現代社会において、わたしたちは、この二た役で生きるしかありません。一方で政府に支配されつつも、他方で政府を監視しなければなりません。見放してしまったり、放棄してしまったり、愛情も怒りもわいてきません。いわば、矛盾に耐えて生きるという態度なのです。

● 「社会」と「人間」への信頼

福沢は第七編で国民の行動について積極面を述べます。これは七十年後に日本国憲法で明確に「主権在民」として規定されました。「もう一つは、国中の人民が全体で相談して、一国と称する団体を作り、自分たちでその団体の規則を設けて、これを実行に移すことである。この立場からすれば、国民はおのおのその国の主人公だと考えられる。」

内田さんは「資本家」について文学的な視点からこう述べます。「現実の資本家は、現実の消費者や労働者と同じく、「生身の人間」であり、単なる記号ではない。彼らの行動にはしばしば「利潤の増大」以外のヒューマンファクターが大きく関与している。」

国民主権や政治改革の理念は、だれが実現するものでしょうか。社会は人と人との関わりで成り立ちます。あらゆる面に人間が関わらない限り、社会改革の実現は不可能です。社会改革の可能性は「人間」にあります。「人間」への信頼です。これは内田さんが「仲間」と考える人間観に通じます。

「社会にいろいろなトラブルがあるときに、「悪いのは誰だ!」という他罰的な設問形式に固着することなく、「まあ、いろいろな困った事はあるけれど、みんなでちょっとずつトラブルの責任を引き受けましょう」と言ってくれるような人間である。」

内田さんは、わたしより二年上です。わたしと同時代を生きています。もしかして、冒頭の女子大学生たちへの批判も、自らの思想態度への自己批判なのかもしれません。

2009. 2. 1
月刊通信

はなしがい

第271号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円 千共）

前回紹介した福沢諭吉について、日本近代思想の研究者・丸山眞男が書いた『福沢諭吉の哲学 他六編』（2001岩波文庫）に収められた二つの文章を読みました。一つは、一九七一年に行われた講演に手を入れて一九九五年に発表した「福沢諭吉の人と思想」、もう一つは、終戦直後の一九四七年に書かれた「福沢諭吉の哲学」です。「人と思想」には福沢の人生観、「哲学」にはその前提となる福沢の社会観が語られています。丸山の語る福沢の思想は、わたしたちが今の時代に生きる参考になります。

●福沢諭吉の人生観

「福沢諭吉の人と思想」の冒頭で、丸山は「福沢コンパス説」を紹介しています。「コンパスというのは、どうしても伸縮して、小さな円も描き、大きな円も書き、一本の脚は自由自在に変化するが、他の一本の脚は一点に固着して動かない。」

その一方で、福沢の思想や言動は無原則のように言われています。しかし、丸山は福沢が生涯一貫して、日本人の「品性を高尚に保つこと」、「高尚に

すること」を目指したといえます。「独立自尊」の精神です。そして、福沢の固定された脚は「中心自体が場との関係で軌跡を描く」のだと言います。「中心の方の脚の描く軌跡も、時代と場所と、あるいは相手というものによって、具体的なあり方が違う」のです。問題は時代と場所と相手です。

丸山は、福沢がよく使う「惑溺」ということを「独立の精神」の反対語だとします。「一心一向にこり固まる」といった状況が、「政治・学問・教育・商売」など、あらゆる領域で生じます。どこか一点に精神が凝集してほかが見えなくなってしまうことです。そんな態度からの解放が「独立自尊」です。「どっちのほうに風が向いているのか、磁場がどうなっているか、どういうイメージが支配的であるか、その磁場から自分の思考を独立させる」のです。

さらに、自分自身の先入見からの解放も問題です。福沢のコンパスの脚の「中心」は「自分の内心」に置かれるものではありません。「自分の精神の内部に沈殿しているところの考え方と異質なものに、いつも接触していようという心構え」です。

●「演技」としての人生

福沢のよく使う比喻に「酒屋の主人、必ずしも酒客にあらず」というのがあります。日本では思想については次のような傾向があります。

「ある主張をすると、その背後にある動機とかあるいは好みを揣摩^し憶測する。それからさらに、その背後の人間を憶測する。」

そこから生じる考えを丸山は「真心イズム」「自然主義」と呼びます。「自分の内心の好悪、自分の内にある心の正直な吐露、それがその人の思想なのだ」という考えです。福沢はそれに逆らいました。

丸山は二つの思想家のタイプを上げています。一つは、「自分の生活とか、気質とか、嗜好とか、好悪とかを、自分の思想に直接表出するタイプ」、もう一つは、「ある場合には自分の好悪に逆らってもある事柄に即して一定のことを主張し、あるいは一定の態度決定をするタイプ」です。

福沢は後者のタイプです。丸山はこの点から福沢を高く評価します。福沢は人の生き方は、ある種の「演技」だと考えました。丸山は言います。

「役割の意識、これは一定の舞台、一定の状況の場で、大勢の人が演技して、その中で自分はどういう演技をするか。ここに役割の意識が生まれます。」人はある行動するとき「これは一体いかなる舞台なのか」と考えるべきです。舞台がまずあって、その中で自分の役割が決まります。その前提として、状況をどう認識するかという問題があります。

「舞台」について、福沢は「時節と場所」をあげています。「空間的、歴史的、時間的な舞台のちがいです。丸山は具体的に「藩、幕府、日本国、アジア、世界」というレベル、「政治、経済、教育、学問、芸術」というジャンルをあげて言います。

「人生は、そこで大勢の人が芝居をしている限り、大事なことは、自分だけでなく、みんながある役割を演じている以上、自分だけでなく、他者の役割を理解するという問題が起ってくる」。

丸山は、他者を理解する方法として「役割交換」を上げています。「自分の役割でない役割を自分が演じてみることです。そうすると、役割の理解とは、他者の理解ということになります。」

●社会変化と未来社会

「福沢論吉の哲学」では福沢の思想の原理が論じられています。福沢の発言の多くは時事的なもので、原理がとらえにくいのですが、丸山は『文明論之概略』の書き出しを手がかりにします。「価値判断の相対性の主張」です。

福沢はヨーロッパの思想を日本に紹介して啓蒙につとめた人ですが、ヨーロッパの実情についてはあくまで相対的に価値を認めていました。その福沢の実践を、丸山は次のように述べています。

「議論による進歩、その前提として、他説に対する寛容、パティキュリズム〔注Ⅱ排他性〕の排除――等々福沢の言説に繰り返しあらわれる主張は、彼の主張（人間交際）や演説・討論に対する異常な熱意とあいまって、人々の交際関係をあたう限り頻繁にし、パースペクティブ〔注Ⅱ見通し〕をできるだけ多様化しようとする、ほとんど衝動的なまでの欲求を物語るものである。」

では、福沢は社会は何によって変わると考えていたのでしょうか。丸山は福沢の次の発言に注目しま

す。「人間社会の運動力は蒸気機関にある」、「鉄は文明開化の塊である」と言います。これはマルクスの唯物史観―人間社会の物質的な生産力が社会発展の原動力であるという考えに接近するものです。そして、福沢は画期的なことを述べます。

「今日まで支配的な政治形態はすでに現在の交通・技術の発展に照応しなくなっている。」

政治の形態が旧態依然となったところに進歩の阻害要因があります。ヨーロッパやアメリカの政府の仕組みでさえ百年前のものだから、政治形態と交通技術の発展との間にギャップが存在すると言います。そして、「一国人民の気風」、「少数の学者や政治家でなくどこまでも人民大衆」に期待をかけます。それから、「制度の破壊ではなく、仕組みを変えてゆく方法はないか」と問いかけます。

その結論は「固定的な社会関係が破れて人間相互の交渉様式がますます多面化すること」です。「社会的交通（人間交際）の頻繁化」―コミュニケーションの発展です。その基礎はコトバの能力にあります。

2009. 3. 1
月刊通信

はなしがい

第272号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円 千共）

今わたしは宮沢賢治を見直しています。きっかけは、詩人・荒川洋治さんの発言でした。ラジオの講演で宮沢賢治について話していました。賢治の取り巻きのような人たちが、「お子様ランチ」にしてしまったというのです。荒川氏は「銀河鉄道の夜」を読み直して、「命がけで作品を書いていたのだ」と実感したと言います。わたしも「銀河鉄道の夜」を読み返して「命がけ」という言葉に納得しました。いろいろなテーマがあります。何よりも重いのは自己犠牲の問題です。二人の幼児を連れて乗車してくる青年が印象に残ります。青年の乗船していた船は氷山にぶつかって沈没しました。タイタニック号の沈没がモデルでしょう。青年は二人の子どもを連れてボートに駆けつけるのですが、他の大勢の人たちにボートを譲って自らは死を選びました。

●労働問題三部作

その後、いくつかの作品を読んで、労働者の問題をテーマにした作品を発見しました。「カイロ団長」です。庭仕事をして自由に働いていた三十疋のあま

がえるが、あるとき殿様がえるの酒屋に寄って酒を飲んで借金を背負わせられます。

それで殿様がえるのけらいにさせられて労働を強制されるようになります。「今日は木を何十本拾ってこい」とか、「今日は花の種を何個拾ってこい」という具合です。どこか、現代の派遣労働を連想させるような話です。労働のありかたについて考えさせられます。ところが、そんな厳しい話が、まるで落語のような「語り口」でおもしろく語られるのです。

そこで思い出したのが、やはり労働にかかわる二つの作品です。「オツベルと象」と「猫の事務所」です。それぞれが現代の労働を問題にしています。わたしは「カイロ団長」と共に賢治の労働問題三部作と呼ぶことにしました。

「オツベルと象」は労働者の搾取の問題を描いています。十六人の百姓を雇う稲こき工場へふらりとやってきた白い象が、主人のオツベルにだまされて鎖で縛りつけられてしまっています。そして、水汲みやたきぎ拾いをさせられます。はじめは十把はのワラをあたえられますが、しだいに量が減らされ、逆に労

働はきびしくなります。そして、一か月後には三把のワラとなります。白い象はしだいにやせて体がつらくなります。そこに現れた童子^{どうじ}のすすめで森の仲間^{とも}に手紙を書いて、最後には救出されるのです。

「猫の事務所」は、官庁における官僚主義の批判です。黒猫を事務長とする事務所における四人の書記の地位争いの話です。元来、猫の中で最も地位の低い黒猫は、常に下からの突き上げにおびえています。ねたみや憎しみの犠牲者となるのは最下位の書記のかま猫です。四匹の猫のやりとりには現代のイジメ問題に通じるリアリティがあります。

●「対話」と声による思想

もう一つ、おもしろい作品を発見しました。「ビジタリアン大祭」です。「ビジタリアン」とはベジタリアン、つまり菜食主義者のことです。カナダのニューファウンランド島にあるヒルティ村で開催されたビジタリアンの世界大会に参加した「私」が報告をするという講演形式の作品です。

大祭の参加者は菜食主義者だけではありません。

反対者も集まり、交互に壇上に立って議論をするのです。菜食主義は賢治にとって重要な思想です。いろいろな作品にもその考えがうかがえます。それを論文のように書かずに、おもしろい物語に仕上げたのは驚くべきことです。

「私」が会場となる教会に着いたとき、赤い車に乗った一団が押しかけてきてピラをまきます。シカゴ食肉組合の人たちです。桃色やねずみ色や黄色や茶色のピラをまいて立ち去ります。そこには、マルサスの人口論、動物心理学、生物分類学、比較解剖学などの立場からの菜食主義反対の考えが述べられています。それがのちに論議のテーマとなるのです。

会場は教会の庭に張られたテントの中です。五百人ほどの参加者のほかに、菜食主義反対の立場の人たちが二十人ばかり参加しています。その人たちが順々にさまざまな根拠から反対論を述べます。

たとえば、植物性食品の消化の悪さ、動物のこころの問題、植物性食品と食料不足のこと、植物と動物との生命のちがい、人間の歯と肉食との関係、宗教における動物食の問題など、七つの問題について

討論が交わされます。この作品の構造から賢治の思考法を読みとることができます。さまざまな角度から検討されて成り立っているのです。

賢治の思想は単一の立場の選択ではなく、複雑なバランスのうえに成り立っています。「カイロ団長」では、ボスであった殿様がえるは、自ら労働をさせられて大失敗をしますが、その後、あまがえるたちから救いの手をさしのべられます。「ビジタリアン大祭」の反対者たちも、最後には賛成の意を表してビジタリアンたちに賛同することになります。たいていの物語に、対立するどちらかが滅ぼされるような形ではなく、双方に幸せをもたらすような結末を与えています。

それは賢治作品の多声性（ポリフォニー）といえるものです。『新編 風の又三郎』（1989新潮文庫）を編集した詩人・天沢退二郎氏はこう指摘します。

「『宮沢賢治は――である』と、一言で言っていることは至難である。本質的に、宮沢賢治の人物作品は多彩・多様・複雑だからである。」

そして、それを暗示するものとして、賢治と親し

い人の発言を紹介します。

「親しい仲間と語り合うときの宮沢賢治は「シンホニイのような」愉快な声で話したという。（中略）気のおけない詩人仲間に向って心おきなく語る詩人賢治の語りぶりが「シンホニイのよう」だったとは、こうして伝聞するだけでも心おどる思いがするではないか。」

そして、賢治作品の性質をこうまとめます。

「云いかえれば、賢治の童話、賢治の精神の多様さと豊かさは、交響曲的な、声の複数性と、音楽的な調律・ハーモニーにある。」

それが「声」のポリフォニーです。それは、賢治の作品からいくらでも拾い出すことができます。天沢氏は、「やまなし」の中の蟹の子どもの会話の声、あるいは、「カイロ団長」であまがえるが働きながらやりとりすることばの声などです。

今、わたしが賢治作品に強くひかれていいるのも、声の多様性、声の表現による生きた文学作品としての魅力に気づかされたからです。これからも賢治作品を声に出して表現して行くつもりです。

2009. 4. 1

月刊通信

はなしがいい

第273号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円 千共）

「論語」には以前から関心がありましたが、近ごろますます重要な書物だと感じています。というのは、自分の考えも孔子や儒教の考え方の影響を受けていると思うようになったからです。むかしは孔子のことばを聞いても、何か当たり前のようで特に感心はしませんでした。しかし、五十を過ぎてから、そんなことばの意味と孔子の偉大さを考え直すようになりました。

「論語」について書かれたすばらしい本があります。加地伸行『「論語」再説』（2009.03中公文庫）です。わたしが以前から抱いていたいろいろな疑問を次々に説き明かしてくれました。また、弱点も見すえながら現実的な人間として描き出された孔子の人物像も魅力です。

●孔子の思想と時代

若いころ、わたしが孔子や儒教の道徳をきらって回避していたのは、それが政治的な思想であると思っただけです。しかし、それは誤解だったようです。この本によると、儒教には次のような三種類があ

るそうです。(一)の「儒(原儒)」というのは、孔子の母の職業で、「個人祈禱を職業とするシャーマン一族」のことです。

(二) 孔子以前の儒(原儒)の土俗宗教性

(三) 孔子の説く儒教の宗教性・哲学性

(三) 孔子より数百年後の漢の時代に始まり、ずっと後まで続く(政治的性格の強い)経学

日本で語られてきた儒教は(三)です。本来、孔子が問題にしたのは(一)と(二)の儒教思想だったのです。つまり、政治のための思想ではなく、宗教や道徳にまつわる人の生き方についてでした。

この本を読んで、とくに納得のいったことは、孔子の思想の歴史的な位置です。孔子は、紀元前五五一年に生まれました。それから七十三歳でなくなっています。今から二五〇〇年ほど前に生きた人です。

当時の中国は、農業社会から商業社会への過渡期でした。二つの社会では人と人との関係はずいぶんちがったものでした。農業社会では、人々は家族や部族として血縁・地縁による共同体をつくっていました。お互いを結びつけるのは、いわば「無償の愛、

真心、友情……」といったものでした。そこで生きていくためのきまりは、慣習によって自然に決められてゆきました。それがいつか道徳となって共同体の生活が保たれたのです。

ところが、商業が発達すると、血縁・地縁によるせまい地域での人々の交流ばかりでなく、より広く人びとの関係が生まれてきます。それまでは共同体の中のきまりで生きてきた人びとが、共同体の枠を超えて接触するようになります。そうすると、それぞれの共同体での慣習や道徳がほかの人たちには通じなくなります。

そこで登場するのが「法」によってお互いの関係を調整するというやり方でした。

「交流によって他国者との関係をつくらざるを得なくなってくると、お互い他国者同士である以上、新しいルールが必要となる。」

そこで「法」による「国家」が成立します。そうして、共同体のきまりによって生きてきた人間と、国家の法によって生きようとする人間との対立が生まれます。孔子は、その矛盾に目を向けたのです。

● 共同体社会と法的社会

孔子の思想が政治的に語られるとき、家族は国家と同一視されています。国家の名のもとに個人は抑圧されます。しかし、孔子の時代は、国家と個人とが対立するような時代ではありませんでした。

「古代中国の社会の場合、国家（それが共同体であろうと、法的社会であろうと）対個人ではなくて、国家対家族という形で考えるべきである。」

つまり、家族はむしろ国家と対立するものです。孔子は戦乱の時代に国家によって翻弄される家族を救うために個人よりも優先して擁護したのです。孔子は、新しく登場した法的社会にたいする批判者でした。投げ捨てられそうになった共同体の道徳や思想を守ろうとしたのです。

じつは、現代社会においても、二つの社会の入れ替わりは完了してはいません。今でも、対立は続いています。今、話題になっている経済不況の問題も、商業の発展と法的な原理が生み出した資本主義経済の結末だといえるのです。

● 「子は父を売るな！」

わたしが長い間、いったいどういう意味なのかと首をひねってきたエピソードがあります。それがこの本で初めて納得がきました。

孔子が六十代半ばを超えて流浪していたころ、ある町の長官からこんな話を聞きます。「自分の町に正義者というあだ名の者がいて、父親が羊を盗んだとき、父の犯罪を隠さずに証言をした」

すると、孔子がすかさず言い返します。「父は子のために隠し、子は父のために隠す。本当の正直とはそういうことだ」

現代でも、同様の問題にだれもが当面する可能性があります。このことばの意味は次のように解説されます。この時代にふさわしい実践的な解決法です。

「孔子のころは、まだ各種共同体が現実機能していた時代である。共同体でそれを裁く長老は、いろいろと事情を考えて罰を決める。時には、罪として公にしないで、事件を闇から闇へと処理するだろうし、時には皆への見せしめに、窃盗程度でも死刑にすることすらある。」

法的社会における処罰は単純なものです。それに對して、共同体社会における処罰では複合的な要素が考慮されます。今さら人間の能力からみて、そんなやり方に戻ることはいえないと思われるかもしれませんが。しかし、考えてみれば、法的社会を生み出した人間たちに生命をつないだのは、共同体社会で生き延びてきた人間たちです。長く人間の生命を育ててきた共同体の原理というものはかんたんに捨て去っていいものではありません。

「はじめに」で著者は「人間の考えること、感じること、行うことは古今東西を通じて本質的に変わっていない」と書いています。「古典の中には、人間やその生きている社会のさまざまな問題とその解決への道の類型とがある。もちろん時代が異なる以上、事情は全く同じではないが、その類型が確実に存在している。」

孔子は古代の偉大な王の思想を手本にしたそうです。わたしたちも孔子を思想の手本として、今という時代をどう生きるか考えることができるでしょう。

毎年、恒例の福島県磐梯町でのドラマリーディングのために、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の台本を作りました。いろいろ発見がありました。この作品は未完成のまま、八十三枚の原稿と一枚のメモが残されていたものです。弟の宮沢清六氏が保存していたものが今は、岩手県花巻市の宮沢賢治記念館に保存されています。

わたしは台本を仕上げてから、ナマ原稿を写真版の本にしたものと知って、さっそく取り寄せました。一見してすばらしいものでした。一枚一枚の手書き原稿の文字には、まるで美術品のような美しさがあります。見ていてあきません。原稿用紙はさまざまです。鉛筆の走り書きのもの、それにインクで手を入れたり、さらに鉛筆で書き加えたもの、原稿用紙に清書しかけたもの、別の作品の原稿用紙の裏に書いたものなどがあります。

今年の公演作品に決めたとき、これまでより楽しそうと思いました。何せこれまでは、シェイクスピアの戯曲のすじを要約したり、セリフを切り取ったので、ずいぶん手間がかかりました。翻訳の

文章には日本語として不自然なところがあるので、ずいぶん手直しが必要でした。

しかし、今回は日本語オリジナルの作品であるから、削ったり切り取ったりすればいいと考えたのです。ところが、予想はまったく外れました。「未完成の作品」という噂どおり、驚くほど不完全な文章でした。それで途中からは文章添削のつもりで片っ端から手を入れました。

しかし、賢治の表現意図を生かすように、作品のテーマを浮き立たせるように注意しました。それは部分的な単純作業ではありません。作品の全体を見ながら、その一部分を削るかどうか、その修飾語を生かすかどうか、検討しなければなりませんでした。

●小説としての「銀河鉄道の夜」

わたしが賢治を見直したのは、詩人の荒川洋治さんの話からでした。周囲の人たちが賢治を「お子様ランチ」のようにしている気がするということです。それに対して、荒川氏が発見したのは「命がけの賢治」でした。

2009. 5. 1

月刊通信

はなしがい

第274号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円 千共）

わたしは台本を作るために、改めてじっくりと「銀河鉄道の夜」を読み直したとき、これは賢治の書きたかった本格小説ではないかと思いました。それまで「童話」という形で自らのモチーフを表現して書いてきた作品は、いわば人のため、みんなの喜びのためでした。

賢治が亡くなったのは、昭和七年（1932）、三十六歳でした。この作品が最初に公開されたのは、賢治の死後二年目に「全集」が出版されたときです。

その後の研究によると、「銀河鉄道の夜」の原稿では構想の変更が四回あったと推定しています。現在、私たちが読んでいるのはその第四次稿です。

当初の作品は現在のものとは根本的に違った構成でした。大きなちがいは、ジョバンニの経験する鉄道の旅の設定のしかたです。最初の三つの構成では、ブルカニロ博士という人物による幻想の実験でした。ところが、賢治の意図と思われる最終のかたちは、ジョバンニ自らが体験する幻想世界なのです。さらに、人物の存在と生活の背景がより明確になっています。現在の作品の冒頭に書かれている、学校の授

業風景や、活版所での仕事や、家出の母親との対話は、すべて第四次稿で書き加えられたものです。

賢治の現実重視の考えは、旅の終わりでジョバンニが汽車を降りてゆく男の子に語ることに集約されます。「天上へなんか行かなくなっちゃいいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもっといいところをこさえなけあいいないって僕の先生がいったよ。」

わたしの台本ではこれを中心テーマに据えました。

●友情と自己犠牲の生き方

「銀河鉄道の夜」の中心テーマは二つあります。

一つは、ジョバンニとカンパネルラとの友情の物語、もう一つは、人のためにどう生きるかという人生の問題です。友情についてのテーマはわかりやすく表現されています。第四次稿で書き込まれたジョバンニの生活環境からはっきりと浮かび上がります。

ジョバンニは母とふたり暮らしです。父親が牢獄にいらしいことがわかります。母親は病氣なので、ジョバンニは朝は新聞配達、夕方は活版所で働いて

います。姉もときどき母の手伝いに来ます。ジョバンニは級友たちから父親のことだからかわれています。しかし、幼なじみのカンパネルラとは仲がよいのです。そのカンパネルラといっしょに銀河鉄道を旅をするとき、女の子をあいだにして嫉妬の思いに悩むのです。

もう一つ、自己犠牲のテーマは、二人の人物が語るエピソードに託されています。男女ふたりの子どもを連れた青年は難破船でようすを語ります。人を押しつけてまで救命ボートに乗ることができなかったために命を落としました。また、女の子はサソリの話を語ります。イタチに襲われたサソリが、井戸に落ちて無駄死にをします。その時、無駄死にをするくらいならイタチに食われてイタチの命を救う方がよかったとサソリが後悔したというのです。

ところが、二つのエピソードとジョバンニとの関わりが不明確なのです。この話をどう受け止めたのか分からないまま、いきなりジョバンニは「北の海で寒さとたたかっている人たちのために自分は何ができるか」とか、「僕はもうあのさそりのようにほ

んとうにみんなの幸いのためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわない」と語るのです。

●「銀河鉄道の夜」の魅力

今回の台本作りで苦労したのは、この点でした。

文章に手を入れて、明解にすればするほど作品の不備な点が見えてきました。しかし、たぶんそうであっても、作品それぞれの部分に賢治らしい発想と想像力に満ちた表現があります。「銀河鉄道の夜」が宮沢賢治の代表作であるとされるのも当然です。ジョバンニの旅の体験は単なる夢物語ではなく、現実を見直すきっかけとなっているからでしょう。

この作品の最大の魅力は、賢治の晩年の思想がジョバンニの感動的な叫びとして表現されたところにあります。ジョバンニの語る人びとへの思いや人生への決意は、高い理想をもって真摯に生きた賢治の思想そのものです。何度、繰り返して読んでも、不思議なところが残る作品です。わたしは今後も、ジョバンニの経験した銀河鉄道の旅を手がかりに、賢治について考えてゆくつもりです。

2009. 6. 1

月刊通信

はなしがいい

第275号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円 (1年1,500円 千共)

わたしが近ごろ関心を持っているのは、新しい社会を形成するための人間関係の原理です。今、世界中で経済不況という大問題が起こっています。そして、多くの人々が経済的にも精神的にもつらい状態におちいっています。そんな状況から打開するためには、どうしたらよいのでしょうか。

経済や政治の仕組みを作って動かしているのは人間たちです。人が人に働きかけることで社会は成り立っています。あらゆる社会の問題が最終的には人間と人間との関係につながるわけです。人間を抜きにした社会改革や経済改革はあり得ません。人と人とは、どうかかわるべきか、何を目ざして、どのようなかわりをつくれればよいのか——これはもう哲学の問題です。

●「人間の条件」とは？

つい最近、ハンナ・アーレントという人を知りました。これまで、わたしの視野に入っていなかった女性の思想家です。たまたま目にした本が、仲正昌樹『今こそアーレントを読み直す』（2009講談社現

代新書）でした。この本はアーレントの思想について書かれたすばらしい入門書です。

アーレントは一九〇六年にドイツで生まれ、大学で哲学を学びました。一九三三年にアメリカへ亡命して、一九七五年に六十九歳で亡くなりました。代表的な著作は『全体主義の起源』と『人間の条件』です。ユダヤ人としてのドイツでの経験から、現代の人間の生き方について考えぬいた人です。

著者は、アーレントの思想を解説しながら、自分の解釈と想像を加えて現代を語っています。「学者」の研究書ではありません。著者がアーレントに成り代わって読者と語り合う本です。その生き生きとした語り口は、アーレントの思考の営みを想像させるものです。

アーレントは人間について三つの条件を挙げています。①労働labor、②仕事work、③活動action、です。とくに重要なのが③「活動」です。これが人間が人間になるための条件だということです。

①は「人間の肉体の生物学的過程」——いわば人間の直接的な生にとって必要な物の生産です。②は

「公的領域」で共同体全体の真理や善について自由に論ずることができたのです。

ところが、近代の資本主義社会では「家」が「経済」の基本単位ではなくなりました。現代の政治は、人びとの「私的領域」に直接かわる利害の調整になってきたのです。「異なった利害、とくに経済的利害を有する人々の間で衝突が起こらないよう調整し、その上でみんなの共通の利益になりそうなることを公の目標として設定し、追求する営み」です。

それぞれの人びとの私的な利害を公的な場に持ちだしたら必ず衝突するものです。その結果、「政治」は、各人の個人的な利害と絡んだ損得の問題の解決手段のようになりました。そうすると、目先の利益の対立によって「共同体」にとっての真理や善が見失われてしまうのです。

●人間性と人間性の教育

アーレントは、人が生まれながらにしてすばらしい人間性を有しているとか、育つにしたがって自然に身につけられるものだとは考えません。公／私が

厳格に分離している環境のもとでの「活動」を続けなければ「人間」らしく振る舞えるようにはなれないと考えるのです。

ここでアーレントが問題にするのが「仮面」や「演技」です。一見すると、「公的領域」における人の態度は「仮面」や「演技」に見えるかもしれませんが、「私的領域」での振る舞いこそが「真実」のように思われがちです。日本では近ごろ、「本当の自分」とか、「自分さがし」などと、「私的領域」の優位性が強調されます。それはあまりに単純な見方です。人間性の真実は、「公的」と「私的」との、どちらか一方で決まるわけではありません。

人間の行動は道徳的なものです。「人目を気にせず」とか、「傍若無人」とか言われます。他人の目がなくても、人は理想とする見地から自分の態度や行動を規制するものです。それが「人間性」の本質です。公的な場での発言こそ、人間を理想に向かつて成長させるものです。そして、考えの対立や考えの多様性を当然のこととして、自由に議論のできる「共同体」こそ、未来社会の理想の姿なのです。

より文化的な作品を生み出す生産です。一般には、①と②をまとめた「労働」を人間の条件としていいます。そこにアーレントは「活動」を加えます。「言語や身ぶりによって他の人（の精神）に対して働きかけ、説得しようとする営み」のことです。

「活動」のモデルとなったのは、古代ギリシア時代のポリス（都市国家）における自由な討論です。それは広い意味で「政治」なのです。今日では、「政治」というと、利害の対立の調整や、支配と被支配といった図式で考えられています。しかし、現代の世界は変わりました。ソヴィエト連邦の崩壊によって、アメリカとソ連との冷戦構造はなくなりました。そこで現代の世界には、新たな「共同体」を形成する可能性が生まれてきました。

●「公的領域」と「私的領域」

かつて、古代ギリシアの民主的なポリスにおいては、対等な立場に立つ「市民」たちの自由な討論を本質とする「政治」が行われました。アーレントの考える「政治」とは、「物質的な利害関係」のしが

らみから自由な市民たちが、自分の利益のためではなく、「ポリス」全体にとって、何がよいことであるのかについて討論し合う営みです。

著者はそれを学校のホームルームの話し合いにたとえています。生徒たちは、生活上の利害とは直接には関わらない問題を取り上げて自由に意見を交換します。そこから、相手との意見のちがいや、なかなか賛同が得られないことを学びます。そうして、ことばを使って人に働きかけるやり方や、自分の意見を変えるべき場合があることも理解します。そのような訓練を通じて、人びとはしだいに論理的な語り方を身につけるのです。

このような「活動」が可能となるためには、条件があります。「公的領域」と「私的領域」との明確な区切りです。「私的領域」とは、家庭ごとに行われる経済の領域です。当時の家庭は今のような核家族ではありません。多くの奴隷を抱えて農業や工業を組織的に営む「家」が「経済」の単位でした。それぞれの家庭が「自己完結した物質的生活の単位」でした。だから、市民権を持った「市民」に限って、

2009. 7. 1
月刊通信

はなしがいい

第276号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円 千共）

今、エコ・ポイントが話題になっています。「エコ」とは「エコロジー」、正確には、「人間を生態系を構成する一員としてとらえ、人間と自然環境・物質循環・社会状況などとの相互関係を考える科学」のことです。それを単純化して、自然環境を守るといった意味で使われています。

要するに、自然環境の保全に貢献するような商品を買うとポイントが付くということです。景気上昇への刺激策です。しかし、景気というものは必ず上昇するものなのでしょうか。景気は、生産と消費に依存しています。多くの人が現代のような生産と消費をつづけたら自然環境が破壊されると感じています。「エコ」とは名ばかりで、さらなる生産と消費の拡大につながることに変わりはありません。

現代の社会は経済一辺倒です。たしかに、社会にとって経済活動は不可欠なものです。しかし、人間にとっては、どんな意味があるのでしょうか。それについて根本から取り上げた本が、ハンナ・アレント著『人間の条件』（1994ちくま学術文庫）です。ドイツに生まれて大学で哲学を学び、1933年にアメ

リカに亡命した女性政治思想家です。ナチス時代のドイツとスターリン時代のソ連の「全体主義」の体験を基礎にして1958年に書かれました。アレントが考える「人間の条件」とは、次の三つです。

①労働 labor、②仕事 work、③活動 action

わたしたちが言う「労働」の内容を「労働」と「仕事」との二つに分けて考えています。それによって、現代社会の生産至上主義、消費社会、過労死などの社会問題を根本から考え直すことができます。

●「労働」と「仕事」

わたしたちの常識では、「労働」はすばらしいこと、よいことであると考えられています。アレントはそう単純には考えません。

「労働」とは、「人間の肉体の生物学的過程に対応する活動力」「生命過程の中で生み出され消費される生活の必要物」、いわば「生命」を維持するための活動です。生物としての人間には必要不可欠なもので、なかば強制されるものです。英語の labor には、「骨折り」「労苦」という意味もあります。

「仕事」とは、人間の「非自然性に対応する活動力」です。生きるための直接の必要性を離れた物を生産し、「人工的」な世界をつくります。その成果は個々人の生き死にのレベルを超えて永続します。

イエス・キリストの有名なことばに「人はパンのみにて生きるにあらず」があります。「パン」は「労働」の成果です。そこにさらに加わるものがあるわけです。そこにアレントが加えたのは「仕事」と「活動」でした。「労働」とは、人間が生きるのに必要な最低条件です。人間はそこを足場にして「仕事」をし、さらに、言論による人間相互の「活動」へと一歩一歩足を進めてきたのです。

●「労働」と「消費」

現代の「労働」はもっぱら「生産性」の面から評価されます。いかにして安い品物を大量に作る事ができるか。作られた品物は、「労働時間」に換算された価格で売買されます。それは「生計を立てる」ことにしばられた「労働」です。「労働」の「生産性」のみが評価の基準であり、しかも、生産の第一

の目的が「消費」であること——これが資本主義経済として完成された経済原理なのです。

すべての生産が「労働」とされることによって、生産は永続的につづけられます。そのために、生産物は次つぎと「消費」されねばなりません。そのとき、労働者に要求されるのが、「消費の努力」です。

今流行っている「エコ」も、形を変えた「消費の努力」の強制です。永遠なる成長とは、永遠なる生産と消費の強制です。人間は唯一「労働」という絶対的な条件を背負わされています。

●現代社会の根本問題

この本が書かれたのは今から五〇年前、当時の世界の話題は人工衛星と核兵器でした。その時代に、アレントは、こんな予測をしています。

「生物学的生命の絶えず循環するサイクルが通過しなければならぬ、労働と消費というこの二つの局面が、その比率を変えて、人間のほとんどすべての「労働力」が消費に費やされるという状態さえやってくるかもしれない。」

かつては、まず「生産」、それから「消費」が求められました。しかし、それが逆転して、「労働」のほとんどすべてが「消費」に向けられかもしれないというのです。アレントはさらに言います。

「この結果、最後には、苦痛と努力の足枷から完全に「解放された」人類は、世界全体を自由に「消費」するようになり、人類が消費にしたいと思うすべてのものを日々自由に再生産するようになるだろう。（中略）いかに多くのものが、毎日毎時間、このような社会の生命過程において現われ、また消えようが、世界にとっては取るに足らないことであろう。」

現代の社会が、これだけ多種多様なものを大量に生産するようになって、さらに限らない生産を目指しています。それは一部の人たちの考えではありません。おそらく大多数の人々が疑うことなく、生産と消費の限らない拡大を願っているでしょう。

今、自動車の生産では、アメリカや日本の会社が倒産したり、経営不振に陥っています。ここから、「労働」と「生産」と「消費」を基本とする人間の活動が反省されるかどうかが問題になります。

「仕事」は「労働」とはちがいます。「労働」が人間の日々の生命のためのエネルギーを生産するのに対して、「仕事」は「人間的な生命が地上において安らぐための条件」を成しています。「仕事」で作られる「物」は、その「耐久性」によって、その「永続性」によって、人間の生きるべき「世界」を樹立するのです。アレントこう言います。

「そのような物に取り囲まれた安らぎがなければ、この生命もけっして人間的ではないであろう。」

次つぎに登場する新製品の「消費」を強制されることは安らぎにはほど遠いものです。「社会は、増大する繁殖力の豊かさによって幻惑され、終わなき過程の円滑な作用にとらえられる」のです。

しかし、近ごろのテレビや新聞を見ると、人々の「消費」への感覚が変わりつつある面も感じられます。「消費」の抑制は、経済的な事情だけではなく、強制される「消費」から逃れるという意味もありそうです。時代の転換の力ぎを握るのは、自らの「人間の条件」をとりもどそうとするわたしたちの意志なのです。

2009. 8. 1

月刊通信

はなしがい

第277号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円 (1年1,500円 千共)

もう一度ハンナ・アレント『人間の条件』(1994)ちくま学芸文庫)について考えてみます。画期的な思想家です。言葉へのこだわりにも哲学があります。文中でしばしば「〇〇とは」と問いかけます。そして、言葉の意味の検討によって新しい世界を見せてくれます。たとえば、「政治」という言葉です。政治というと、利益の獲得競争のように思われがちです。いま日本では、目前に迫った総選挙が話題です。自民党と民主党とが議論をしています。どちらも特定の集団の経済的な利益を争う点では共通しています。また「政治」といえば「社会」と深い関わりがあります。だれでも日常生活で「社会」という言葉を使っていますが、あらためて考えてみると、その意味を解き明かすのはなかなかむずかしいのです。

●人間の条件とは？

アレントは、社会とはどのようなものなのか、哲学的な観点から説明してくれます。根本には「人間の条件」――①労働、②仕事、③活動という三つの規定があります。第一に、「労働」をして生命に必要な

な物資を生産しては消費して生きるのが人間の基本です。第二に、短期間に消費されるのではなく、より長く保持される品物をつくる「仕事」があります。第三に、人と人とは、言論による「活動」を通じて人間同士の交流のなかで生きています。

古代ギリシアの市民は「活動」を重視しました。ポリスという公共の場で、お互いの言論活動に最高の価値を見いだしていました。ところが、現代社会では、生存の基礎である「労働」に絶対的な価値があたえられています。ほとんどの品物が生産され消費される消耗品として扱われます。そして、「仕事」や「活動」は「労働」に従属させられています。

「活動」とは、人間同士がお互いを人間として評価し合い、お互いの価値を発揮することです。しかし、現代の人間は、ものの生産と消費という最低限の生存条件を目指して生きるかのようになっています。人間はもっと豊かに生きられるはずで

●「社会」の特徴

古代ギリシア人の公的な場での活動は、人間が生

●現代社会の基本原理解

現代の社会は経済原理で動いています。アレントは「経済学」が成立するための条件をこう語ります。「近代の経済学の根本にあるのは、これと同一の画一主義である。つまり、近代の経済学は、人間は行動するのであって、お互い同士活動するのではないと仮定している。」

ここにおいては、人間の個性などは問題になりません。ただ、物を生産し、消費するという次元で生きる「労働する人間」でありさえすればいいのです。「この経済学が科学的性格を帯びるようになったのは、ようやく人間が社会的存在となり、一致して

一定の行動パターンに従い、そのため、規則を守らない人たちが非社会的あるいは異常とみなされるようになってからである。」

これも「画一主義」と「均質化」の原理です。「社会」について、アレントの結論はこうです。「だから社会とは、ただ生命の維持のためにのみ存在する相互依存の事実が公的な重要性を帯び、ただ生存にのみ結びついた活動力が公的領域に現れるのを許されている形式にはかならない。」

アレントの理想とする「活動」とは、人間の直接の生命維持から解放されたものです。古代ギリシャのポリスを例にして、多種多様な人間が言論による議論を交わし、お互いの立場を示し合って築きあげた過程そのものを意味します。

では、現代において、私たちにどのような「活動」が可能なのでしょう。今、話題の日本の総選挙で問われている根本問題もここにあります。政治が、「労働」を絶対視する経済原理にしたがうのか、それとも、重要な「人間の条件」として「活動」を根本にすえた社会改革となるのかという問題なのです。

きることそのものでした。市民全員が議員のような立場で共同体の運命を真剣に考えたのです。それが「政治」でした。だから、ギリシア人は私生活を「愚かしい」と考えました。公的なものより価値が低いのです。そもそも「私生活」という言葉は「なにものかを奪われている」状態という意味でした。ところが近代になって「社会」が登場すると私生活の問題がクローズアップされるようになります。近ごろ家族の解体が問題になっています。一時期は、「核家族」が家族の基本単位とされ、大家族からの自立として、もてはやされました。しかし、「社会の勃興と家族の衰退は時を同じくしていた」のです。アレントは、「家族という単位がそれぞれの社会集団へ吸収されていった」のだと言います。かつて、家族は「家長」という権力者のもとで「共通の利害と単一の意見にしたがって」まとまっていた。しかし、「社会」はちがいます。

「社会の場合には、家族より人員が多いので、それだけでなく、共通するただ一つの利害と、全員が認めるただ一つの意見が当然もっている力が、さら

に強められる。そして共通の利害と正しい意見を代表する唯一の人間が行使する実際のな支配は、家族の場合と違って、最終的には不要となる。」

こんな「社会」の最終的段階をアレントは「画一主義」と呼んでいます。現代においては、いったいだれが社会を動かしているのか、だれがどう変われば社会が変わるのか、ますます不明確になっています。だから、アレントは言うのです。「社会は一種の無人支配に変貌する。」「無人支配は必ずしも無支配ではない。実際、それはある環境のもとでは、最も無慈悲で、最も暴君的な支配の一つでさえある。」

「統治の最も社会的な形式は官僚制である。」

この完成形態が「全体主義」の社会です。こんな社会は無責任なものに感じられます。しかし、人々を強制的に従わせる力を持つのです。

「社会は、それぞれの成員に、ある種の行動を期待し、無数の多様な規律を押しつける。そして、これらの規則は、すべてその成員を「正常化」し、彼の行動させ、自発的な活動やすぐれた成果を排除する傾向をもつ。」

2009. 9. 1
月刊通信

はなしがい

第278号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円 千共）

ハンナ・アレント著『人間の条件』（1951ちくま文庫）に刺激されて、プラトンの対話篇『ゴルギアス』を読みました。ソクラテスを主人公にした戯曲の形式です。ソクラテスが人間の欲望と生き方との関係について、甕^{かめ}を所有する人にたとえて語っています。欲望に対してどのような立場を取るかによって二つの生き方があります。一つは、①秩序ある生活、もう一つは、②放埒^{ほうちやう}な生き方です。

●欲望と人間の生き方

ひとりの人が持っている甕^{かめ}は、どれも傷のない健全なもので、一つには酒、一つには蜜、一つには乳と、いろいろなものが満たされています。一度満たしてしまえば、あとはもう注ぎ入れることもしなければ、それに気を使うこともありません。それが秩序ある生活です。それに対して、もうひとりの人の甕^{かめ}は穴が開いた傷ものばかりなので、夜となく昼となく、絶えずそれを満たす仕事を続けていなければなりません。それが放埒^{ほうちやう}な生き方です。

ソクラテス是对話の相手に「放埒^{ほうちやう}な人の生活の方

が、秩序ある人の生活よりも、幸福だということだろうか。」と問いかけます。すると、相手は次のような内容で反論します。

「自分の甕^{かめ}が満たされた第一の男にとっては、もはや何の快楽もあり得ないわけだから、石にも似た生き方だ。何しろ、いったん満たされてしまった後は、もはや喜びも悲しみも、何もなしに生きるのだから。いや、快く生きるということは、できるだけたくさん流れ込むという、他ならぬその事の中にあるのだ。」

ソクラテスはまたそれに反論します。

「たくさん流れ込むとすれば、当然の理として、出てゆく方もまた、たくさん出なければならぬし、出るための穴も、やはり何か大きなものでなければならぬわけだね。」

まるで現代の消費生活です。はるか昔、プラトンは消費と欲望との関係を描きました。現代の資本主義社会では、せっかく満たされた人々の甕^{かめ}のどこかに始終、傷がつけられて中身がこぼれています。

今回の総選挙は民主党の勝利に終わりましたが、

選挙の最中には国民からさまざまな要求が出ました。とくに目立ったのが「景気回復」です。国民の多くは日本のこれまでの経済成長がこれからも続くことを前提にしています。それは可能なのでしょうか。

わたしは、それは原理的に無理だと思っています。なぜなら、地球の資源に限度があるからです。引き続き経済成長をしていくならば、限りなく地球の資源を消費することになります。現代の人間は近代以前と比べて、はるかに膨大な力を持っています。地球をまるごと破壊するくらい簡単です。

経済成長とはだれのためのものでしょうか。人間のためというよりは、経済システムのためです。まだ世界には生活物資が不足した人たちが大ぜいいます。しかし、経済発展はその人たちのものではありません。なによりも資本を拡大するに有効なものであるだけ早く消費されるように生産されます。そのため、本来必要な消費物資が不足するのです。

好例は肉の生産です。生産された穀物を直接人間が食べれば、多くの人たちが生きられます。それなのに、わざわざ牛に食べさせて食肉を生産していま

す。より高価な消費物資の生産のために多くの餓えた人々が放置されるのです。

●新しいものと古いもの

現代の生産は消費を促進させます。次つぎと新しいものを求める欲望を生み出します。「新しいものはいい」という考えです。人間についても、高齢者よりも若い人、若い人よりも子どもと、価値づけが高くなります。人間はまるで生産のベルトに乗せられた「消耗品」のように評価されます。

その一方で、近ごろ、「健康ブーム」「健康食ブーム」というものがあります。わたしは以前からこれには疑問をいだいています。これも、ハンナ・アレントのいう三つの「人間の条件」がからんでいます。人間は「労働」を基礎として、「仕事」をしたり、さらに「活動」をして生きているわけです。ところが、基礎であるべき「労働」が極端に重視されます。ここには生命の生産も含まれます。まるで、人間の条件のほとんどすべてがここにあるかのように語られるのです。

社会状況が切迫して多くの人たちが生きるか死ぬかの瀬戸際にある状況ならば意味があるでしょう。

しかし今、「生命第一」を唱えることは、それに目を奪われて、ほかの問題を見失なう危険があります。

世の中が不景気になるとテレビドラマではよく、いわゆる「難病もの」が出てきます。そんなドラマを見ると、わたしは行動の意欲をそがれるような気が持ちになります。そして、「生きているだけでありがたいのだ」と説教されているような気になります。さて、プラトンは、人が生きるということについて、ソクラテスに次のように語らせています。

「どれだけの期間生きながらえるかというようなことをよく考えて、いたずらに生命を惜しんだりするのは、いやしくもほんとうの男子たるもの、なすべきところではないだろうからね。いな、そうした点については一切を神に任せ、女たちの言うとおりに、何びとも定められた真の運命を免れることはできぬと信じて、考えるべきは、その次にくる問題、すなわち、いかにすればその定められた生(は)の期間を、できるだけよく生きることができるかという

問題なのだ」

死の問題をとりあげたり、命の大切さをとてつもなく重大なことのよう唱えることによって、よりよく生きようとする意欲を失わせたり、生活を低い位置にとどめることになるかもしれません。

では、人はどう生きるべきか、その一つの答えを、プラトンが次のように語ります。

「だからぼくは、世の多くの人々の評価を気にかけるのはやめて、ただ真実を身につけることを習いながら、生きているあいだも、また死ぬ時が来たら死んでゆくときも、ぼくの力の及ぶ限り、ほんとうの意味ですぐれた善き人間であるように、つとめていこうと思っている。」

もう一つ、わたしの好きな宮沢賢治のことばがあります。生徒から「なぜ人は生きるのですか？」と問われたとき、賢治は「それを考えるために人間は生きているのだと思う」と答えたそうです。今の生を充実させていくことの重要性です。そのためにこそ、欲望にあおられる生活ではなく、秩序ある生活が理想なのです。

2009. 10. 1
月刊通信

はなしがい

第279号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円 千共）

九月七日に竹内敏晴さんが亡くなりました。声の表現について実践的な研究をしていた人です。わたしは以前から注目して、何冊かの著作を読んでいました。一年前には『語ること（ドラマ）―朗読源論のこころみ』（初版1981再版1994国土社。以後『ドラマ』と略）を読みました。これはすばらしい理論だと思って、この通信でも紹介しました。

先日、林竹二との対話集『からだ・魂のドラマー「生きる力」がめざめるために』（藤原書店2006）を見つめました。わたしが林竹二を知ったのは、新宿の小さな劇場で見た授業実践の記録映画を通じてです。たしか、『人間について』という授業の記録でした。制作者である「グループ仕事」の名前も覚えていました。今から三十年も前のことです。授業の内容についてもうろ覚えで、映画で見たのか、本で読んだのか、区別がつかなくなっています。

わたしの記憶にあるのは、授業を受けている生徒たちの生き生きとした表情です。林竹二の話が進むにつれて、一人一人の表情が明らかに美しく変化するのです。

それ以来、わたしは何冊か林竹二の著作を読んでいます。しかし、何よりも感心したのは、やはり授業という実践のありかたでした。今回の本では、その裏付けとなる教育論に再びふれた思いがしました。

●林竹二の教育論

林竹二の発言には本質的な指摘がありました。その一つが、キーワードとなる「吟味」です。子どもたちに根本的な問いを発して、それに答えさせるというやりとりのことです。

「ソクラテス流に言う一つの意見（ドクサ）の中にある自己矛盾を問答によって引き出してみせる。つぶすということが本当に成立するのは子ども自身がその問答を通じて自分の意見が、到底維持できないことを納得するときなんです。」

そのために教師の力量が求められます。教師の心がけについて、こう述べています。

「私は実践でためされる前の使命感もテクニクも信用しません。学ぼうとする意志こそが、私は教師であるための一番大事な決定的条件じゃないか

したいのだ」という意味のことをいいます。

林竹二のいう「吟味」とは、「ことば」を手段とする対話によって人間の深みを探るものです。その考えから、「からだ」へのこだわりが、外面的な「ふれあい」という浅いところにとどまる危険を突いたのでしょう。林竹二は、ソクラテスの問答法を教育の基本とする考え方について述べています。

「授業において重要なのは、子どもの出す答えが「当たって」いるかどうかではなくて、その授業の中で、学習が——少し大げさなことばを使えば、自分を賭けた学習がおこなわれているかどうかなのです。ことばをかえていえば、答えそのものでなく、答えの「根」にあるものが問われているのです。」

その手段となるのが「ことば」なのです。竹内敏晴の『ドラマ』の初版は一九八一年です。そこには、たしかに、林竹二との対話を通じて認識した「ことば」の重要性が強く表現されています。

●「からだ」と「ことば」

わたしは、竹内敏晴の原点——「からだ」と「こ

とば」との結合という考えをこの本から読みとりました。当時八十一歳の竹内敏晴は、何度も原稿を書き直して仕上げたそうです。すでに通り過ぎた地点を見定められない歯がゆさがあったのだと思います。

一年前に「通信267号」で『ドラマ』から引用した朗読についての考えをもう一度紹介いたします。

「朗読そのものがうまくなるってことを、私なんかの場合には、あまりもくろんではない。どういふことかという、子どもが全身で生き生きとして、声も出るし、思考も想像力も活発に働き、とにかく今、一瞬のゆるみもなく表現が動き出している、今も充実して生きているというところがそこで成り立っていい。そういうことの一つの側面、あるいは、そういうことを持ちきたすためのきっかけとして、朗読というものが考えられるべきではないかと考えているのです。」

これが、林竹二との対話の後の理論的な到達点です。「からだ」と「ことば」との結びつきです。これを原点として、竹内敏晴のその後の仕事があるのだと思います。

と思う。学ぶ気持ちがなくなったら、もう教師の資格はないと思います。」

「私はその状況に子どもを立たせるためにいろいろことばを費やします。ところが教師は、それを教えようとしているというふうにとる。授業者の発言量が多くては、あれは講義であって、授業でないというのです。」

「私が生き生きとしているのではなくて、授業で子どもに對したときに私が生き生きとするのです。子どもと向き合ったとき、そして授業しているときに。その相手がなきゃだめ。相手が私を生き生きとさせてくれるんです。」

林竹二が、なぜ晩年まで授業の場に臨んだのか、よくわかります。

●対話についての感想

最初のうちはおもしろくて、どんどん読み進みました。しかし、あとに行くにつれて、何かちがうなという感じがしてきました。対話が足踏みをしているように歯がゆいのです。

林竹二の授業実践について話すのですが、前提となる話がわからないわけですから、竹内敏晴の結論的なコメントを聞くことになります。そのために、教育の場にいる子どもたちも見えなくなります。わたしの歯がゆさはそこにあったのです。

この本には、三つの対話が収められています。それぞれ、一九七六年、一九七八年、一九八三年の発表です。最新の対話でも二十六年たっています。その間の教育状況の変化がありますから、語られる内容に時代のズレがあるということもあります。

わたしは、それよりも、『ドラマ』でつかんでいた竹内敏晴の考え方との差を感じたのです。しかし、対話と『ドラマ』との関係を年代順に並べてみて、その意味がわかってきました。

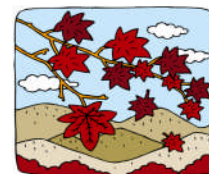
第三の対話の冒頭で、林竹二は竹内敏晴に「あなたのいう「からだ」は、ソクラテスのいう「魂」と同じようなものじゃないかと問いかけます。第二の対話では、二人のちがいを指摘します。「あなたは「ふれあい」というが、私は「人間のなかに根深くひそんでいる原形質の衝動みたいなもの」を引き出

2009. 11. 1
月刊通信

はなしがい

第280号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円 千共）

また、すばらしい女性哲学者を発見しました。スザンヌ・K・ランガー（1895—1985）です。『哲学的素描』（1974法政大学出版／原著1962）は、人間と言語と芸術との関わりについて、根本原理が書かれた本です。この本は九章で構成されています。人間の感覚や感情がどのように発達したのか。人間にとってシンボルとは何か。科学文明の発達によって人間はどう変化したのか。現代社会において人間はどう生きるべきか——人類の誕生から現代に至る壮大な歴史を見る思いがします。

●言語・人間・芸術

わたしは「第五章 芸術の文化的重要性」にある次のことばにひかれました。

「芸術とは、社会的意味でも、また個人的意味においても、人間が進歩していく尖端（せんたん）なのです。芸術の卑俗化は、民族的衰退（すいたい）の最も確実な徴候（ちこう）である。」

わたしは現代日本の芸術の貧しさを連想しました。テレビドラマや映画や演劇などを見ていると、ここ数十年のあいだ、貧困化がすすんでいる気がします。

わたしたちはおもにコトバを通じて人間の考えや思いを知ります。しかし、絵画、彫刻、建築、音楽、舞踏、文学、演劇および映画なども、「人間感情を表現する知覚可能な形式」なのです。芸術表現によって、わたしたちは世界を見るのです。

芸術の「表現」とは、「感情の吐露」ではありません。「観念の提示」です。ランガーはこんな例で説明しています。

「怒り狂っている人間を見て、彼の怒りはみごとに表現されているとは言わないものである。」

怒りを表現するためには、何かのかたちにすればよいのです。

「もし怒り狂っている人間が、自分は何について腹を立てているのか説明しようとするれば、彼は落ち着きを取り戻し、情緒的表現を抑え、自分の観念を表現する言葉を見つけないといけない。」

●芸術という分野

人間にとって言語は重要な観念の形式です。しかし、言語だけではとらえられない世界もあります。

感情と情緒の世界です。芸術ならば表現できます。「人間感情とはあいまいな凝集体ではなく、織物のようなものである。(中略)無限に複雑な活動とリズムを持つパターンである。」

それが芸術のかたちとして表現されます。作品自体が、「生命力、情緒、主観的現実」という直接のビジョンを示します。わたしたちが絵画を見ると、絵の具を塗りつけられたキャンバスを見るのではありません。そこに描かれた人物像やリンゴを通じて画家の感情や情緒とともに自分をも知るのである。

言語にも似たようなはたらきがあります。情報伝達の作用をするだけではありません。ものごとに向き合うときに、対象を分解したり、いくつかの単位に区分したり、ことから同士を組み立てたりします。その作業の前提となるのが想像力です。

「論弁的シンボル(言語)が、われわれの周囲にある事物やそれらとわれわれとの関係を意識化するたすけとなるのと同じく、芸術は、主観的現実、感情および情緒などを意識化するのに役立つ、つまり、芸術は内的経験に形式を与え、それらを概念化する

のである。」

「おのれ自身を知れ」などと言われますが、人はなかなか自分を知ることができません。わけがわからずにイライラしたり、自分をコントロールできなくなることもあります。それは犯罪にさえつながりかねません。しかし、芸術が救いになります。

「主観的経験の自然な形式がシンボルによる表出の程度にまで抽象化されたとき、感情を想像したり、その本質を理解するために、そのような形式を利用することが可能になる。おのれ自身についての知識、すなわち生命と精神とのあらゆる側面に対する洞察は、芸術的想像力から生まれるのだ。」

つまり、はっきりとコトバにならないことでも、何らかの芸術的な手段を用いれば、表現できるので。大げさなことではなく、紙にエンピツで線を引いたり絵を描いたり、自分の思いを文章に書いたり、小説を声に出して読み上げることが出発点なのです。

●人間教育としての芸術教育

芸術の影響力は、個人を超えて広く深く浸透しま

す。さまざまな芸術ジャンルが、人々の生活意識に影響を与えています。

「絵本、物語、われわれが聴く音楽などは——われわれの経験に事実上形式を与えるのだ。」「映画、ジュークボックス、ショーウィンドウ、および映画雑誌などにおける大衆芸術家によって形を与えられるのだ。」

時代と芸術との関係で言うならば、「芸術は感情を新しく定式化するのであり、それは文化的時代の発端」なのです。つまり、芸術は人々の未来の感情や情緒を先取りするものです。そこで「芸術的教育」が問題となります。ランガーはこう断言します。

「感情教育こそが実は人間教育の核心になるのである。」

「芸術が文化を進歩させる」ということがよく言われますが、ランガーは文化の安定——個人生活を安定させる機能を取り上げます。

「それは、われわれが芸術作品を観たり、聴いたり、読んだりするときに受けとるビジョンを教育することである。」

わたしはこれこそ教育の基本だと思っています。シンボルを通じて想像力をはたらかせることで、人間と社会との関わりが見えてくるのです。現実社会を批評的にとらえる能力もここから生まれます。

「日常的光景(もしくは音声、運動あるいは事象)を内的ビジョンに同化したり、また外的世界に表現性と情緒的趣意を付与したりするような、芸術家の眼を発達させるものである。」

人間の判断は、善と悪についてだけでなく、美と醜についても行われます。未来への希望も現実の世界をとらえることから生まれるのです。ランガーは芸術教育の意義についてこうまとめます。

「芸術教育とは感情の教育であり、それを軽視する社会は、おのれ自身を無定形な情緒にゆだねてしまうことになるであろう。悪しき芸術は感情を墮落させる。これこそ、独裁者や扇動政治家が利用する非合理主義における重大な因子であるのだ。」

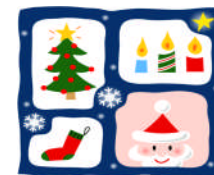
芸術の教育は、個人の成長にとってだけでなく、文化的な社会と人間とを育てるためにも重要なのです。

2009. 12. 1
月刊通信

はなしがい

第281号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円 千共）

久留島武彦という人をご存知でしょうか。先月、11月3日（火）に九州の大分県由布市で、「おおいた語りべの会」に招かれて「語る喜び・聞く楽しみー声による文学の表現」という題で表現よみについての講演をしました。

その準備の最中に、この人の名を耳にしたのです。大分県玖珠市の出身で童話を語る活動をしていたそうです。さっそくインターネットのアマゾンで本を探すと『童話術講話』が見つかりました。読んでおどろきました。童話の語り方と子どもの意識についてじつに具体的に書かれています。ただ単に童話の語りかただけでなく、広く日本人の音声言語の能力を高めることを目指して、さまざまな活動をしていたこともわかりました。

2001年と2003年に、大分県教育委員会から先哲叢書として全四巻の資料集が出版されていました。都立の図書館から借りた第三巻が、今わたしの手元にあります。これには、主著とされる『通俗雄弁術』が収められています。大正のはじめに書かれたものですが、その理論と実践方法は今でも決して古くあ

りません。それどころか、今の日本においても話しコトバ上達の基礎理論となるものです。

●久留島武彦という人

久留島武彦は、明治7年（1874）の生まれです。亡くなったのは昭和35年（1960）、86歳でした。

わたしが久留島さんの名前を知らなかったのは、その活動が文筆上のものでなく、さまざまな講演をすることが中心だったからです。幸い、インターネットには久留島さんの講演の録音が十五本ほどアップされています。わたしは聴けるかぎり聞きました。初めて聴いたときには驚きました。声がいいのです。艶と張りのある声は、狂言師の野村万作さんに似ています。話にまったくムダがなく、そのまま書き写して文章になる話です。語り口調も丁寧で、子どもたちを相手にするときにも敬語が使われています。

話しの理論は四十代までにほぼ完成しています。後半生は、ほとんど日本全国をめぐる講演活動に費やされました。七十年代、八十年代までつづけています。亡くなった年にも、ラジオに出演して対談を

しています。その声はじつに若々しいものです。

●子どもにとっての童話とは？

わたしが入手できた『童話術講話』（1973）ぐま社は、昭和10年（1935）久留島さんが六十歳のときのものです。講演の内容を本にまとめたのですが、童話の理論が総合的に語られています。話の心構え、童話の価値、子どもの心理、話す場所、語り方、発声と声、さらに、子どもの発展段階に応じた童話の選び方まで書かれています。何よりも、子どもにとっての童話の価値を重視しています。

「子供には童話はおやつではない。お菓子ではないのであります。」「子供には童話は哲学であります。子供の人生観をこれで開くものであります。生活意識をこれによって刺激して社会に対する適応性を持たせる、あるいは発展するところの解釈をあたえるもので、これは重大なるものであると私は思う。」

わたしは子どもたちにとって、生きた声で語られる話の大切なことをあらためて思い知らされました。しかし、わたしは今、常識とされる現在の朗読や

読みかせには不満なのです。ときどき、テレビやインターネットなどで、読み聞かせや朗読を聞くことがあります。正直言って、たいていおもしろくないものです。ところが、子どもたちは健気なものです。真剣にじっと耳を傾けて聞いています。

活動をする人たちの努力は認めますが、はたしてだれのために読んでいるのでしょうか。読み手自身の喜びは感じられますが、はたして子どもたちはどうなのか、もっとよい読み方や語り方があるのではないかと思ってしまうのです。

一般に朗読や読み聞かせの分野には理論がありません。ただ、やさしい気持ちさえあればいいという善意のボランティアの世界です。久留島さんの考えるような高い理想を実現するためにはもっと研究や工夫が必要だと思います。ただ文章を読み上げるのでは、せっかくの活動がもったいないのです。

●「言葉」と「響き」

久留島さんのお話しには、おとも子どもも問わずに心に訴える力があります。それはことばの「響

き」なのです。お話しの本質はそこにあります。久留島さんの語り方自体が心に響く見本なのです。

「言葉の中にも耳に語ると同時に心に語るところの言葉があるのであります。」「人にはたらきかけるはたらき方が二つある。一つは響きとなって現われ、一つは言葉となってはたらく。」「響きは心にうったえるものであります。」

いわゆる「読みかせ」の実践で重要なもの「響き」なのです。言葉と響きとが一体になって、子どもたちにうったえる作品となります。自然まかせで読んだり語ったりしては、お話し要素の半分が失われてしまいます。それは字面だけの読みや語りとなってしまう。文字として共通する言葉を読み上げるだけではいけません。そんな言葉は人に訴えません。「心をその場所に持って行って、その人の心を直接に理解した人から考えるならば、響きが伴わない言葉であります。」

このあたりに久留島さんが「朗読」を物足らなく思う根拠があります。それでも、わたしは既成の文学作品を語ることの可能性を信じています。一般の

朗読や読み聞かせの心がけを、今一步、理論化する必要があります。朗読や読み聞かせの問題点は、「響き」についての無意識性にあります。個人まかせにしているのです。だから、その表現は結局、その人その人の思いこみや固定観念によってパターン化された「響き」になってしまうのです。

大切なのは、作品そのものの特性——「語り口」の把握です。作品を書いた当人でも、いったん自分からはなれた作品を語ることはむずかしいのです。書くときの思いは再現しにくいのです。あらかじめ内容を知っているからです。だから、そこに表現としての「よみ」の可能性があります。久留島さんの口演童話も、ゼロからの創造過程ではなく、できているお話しをその場で再生産して演ずるものでした。お話しの研究とはそのためのものです。

何よりも大切なのは、子どもの哲学ともなるべき作品の「言葉」を分析して、その背後にある「響き」までもとらえることです。そのためには、表現よみの理論の基礎である「語り口」の把握が有効なのです。